

# J.-J.ルソーにおける植物観と植物の教育力

—研究ノート—

基礎教育学コース 荒井宏祐

La réflexion et La capacité éducative du végétal chez J.-J. Rousseau

—Cahier de recherches—

Hirosuke ARAI

Dans cet article, Je voudrais proposer que Rousseau explique deux capacités éducatives du végétal, l'une, celle qu'on peut étudier sous la question « qu'est-ce que le végétal? », et l'autre, celle qu'on peut retrouver par la observation quelque chose, par exemple, la religion naturelle (le Dieu est le Créateur), excepté le végétal lui-même.

## 目次

はじめに—本稿の目的

- 1 先行研究の検討
  - A 外国語文献
  - B 日本語文献
- 2 ルソーの植物観と教育面への反映
  - A 循環作用を営むもの
  - B 社会変動の被害を受ける植物
  - C 他から独立した生命力をもち、有機的な組織体である植物
  - D 健康食材としての植物
- 3 人間と自然との共生につながる植物観
  - A 人間非中心主義的な自然界観
  - B 人間の賢明さと徳、魂を益する自然（植物）の研究
  - C 美的な感情をもたらす植物
  - D 毒性と薬効がある植物
- 4 植物の教育力の理由の考察とその根拠
  - A 植物の持つ未知性
  - B それ自体に資源性などがある自然性
  - C 波及性
  - D 植物の持つ未知性
  - E それ自体に資源性などがある自然性
  - F 波及性
- 5 ルソーの植物学の知識水準に関する同時代の評価  
総括  
今後の研究課題

## はじめに—本稿の目的

『エミール』などによって教育思想家として著名なジャン・ジャック・ルソー（Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778, 以下「ルソー」という）には、「彼が教師として、若い人人を指導するために書いた」（Bernardi, B., 2003, 14）とされる『化学教程』（Institutions Chimiques）（ET, X）という著作があり、また文通による植物の教育実践家としての一面がある。本稿では、これらの資料に注目しながら、ルソーが植物観察や思索などから導きだした植物観の意味を検討して、植物の観察が何をもちたかを考察するとともに、その中に自然界と人間との共生につながるものがあるかを吟味する。また植物観が教育実践面に反映されていることを植物が秘める教育力の表れと考え、それはいかなるものか、また何故植物は人を教育する力を秘めると考えられるのか、その理由と根拠を考察する。植物は、例えばアサガオの観察や図画の写生のモデルなど昔から学校教育に取り入れられてきた。つまり、植物は前者のように植物そのものについて学ぶ教材であるとともに、後者のように植物を借りてその色や形などをよく見分け、正確に写生できる技術を取得するなどの教育の媒体の一つと見られてきた。ここでは、これらのことをルソーにおける植物観や植物の教育との関連などから改めて考察する。なお、植物観の検討対象は、以下の作品、著述とする（執筆・編集または出版順（推定を含む））。

・『化学教程』

- ・『学問芸術論』『人間不平等起源論』(以下『不平等論』という)「道徳書簡』『新エロイーズ』『エミール』『告白』『ルソー ジャン=ジャックを裁く—対話』(以下『対話』という)『孤独な散歩者の夢想』(以下『夢想』という)
- ・マルゼルヴ (Malesherbes, Chrétien-Guillaume de Lamoinon de, 1721-1789) とポートルランド公爵夫人 (Margaret Cavendish, duchesse de Portland, 1715-1785, 以下「公爵夫人」ということがある) との植物関係の文通「植物学断片」

また、教育面の検討対象はドレッセル夫人 (Delessert, Madeleine-Catherine, 1747-1816, 以下「夫人」という) あての20通ほどの文通による教育<sup>1)</sup>の手紙(以下「手紙」という)とルソーが途中まで編集した「植物用語辞典断片」(以下「辞典断片」という)とする。後者は、学習に必要な教育資料の一つと思われる。

なお、ここで『化学教程』と植物の教育に関する手紙について説明しておく。ルソーが、化学に関心を抱き若い頃に「この学問に関して」著述を試みたことは『告白』にも記されている(OCI, 341, 中, 107)<sup>2)</sup>。『化学教程』は、1747年頃編集されたと推定<sup>3)</sup>される未完の著作で、2012年に初めてルソー全集に収録(ET X)された。また、手紙は夫人からの当時4歳の娘に植物に関する初歩的な教育をしてほしいとの依頼に応えたものである(文通期間はパリ—リヨン間, 1771年から1774年)。また、本稿の用語「植物観」の「植物」は「植物」一般や個々の植物、森林など植物の集合体、あるいは植物標本や広く植物界または植物学研究の意味を含めて用いる。「植物観」については、やや限定的にこれらの「植物」の見方や考え方の意味で使用する。

## 1 先行研究の検討

本稿のテーマに関する先行研究は調査中であり、管見の範囲で関連文献の中から植物観を論じている一節を、外国語文献と日本語文献の各1点について検討する。

### A 外国語文献

Kobayashi Takuya, 2012 « Introduction générale », dans ET XI, *Ecrits sur la Botanique*, Raymond Trousson et Frédéric S., Eigeldinger, (dir.), Édition critique par Takuya Kobayashi, Éditions Slakine, Éditions Champion. 著者は、ルソー生誕300年の記念出版である新ルソー全集(ET)の中で「植物学についての著作」の

巻の編集を担当した。本論考はその「全体的な序文」だが、そこで著者はルソーの植物についての記述の「特徴的な概念と傾向」として次の3点をあげている(Ibid., 6-14)。

- ・植物の医学的な利用への反対

当時、薬学的な利用に特化していた植物研究への反対を指摘したもので「辞典断片」や「植物学断片」などに見出している。

- ・人工栽培や変形された植物の「怪物」観

著者は、植物学者のリンネがキリスト教徒で「全能の神は、全存在をいかなる欠陥もなく創造した」としたことを述べた後、夫人あての手紙の中で「ルソーが「怪物」と呼んでいた人工栽培の植物や変形を好まなかったことを思いだそう」(Ibid., 10)と言っている。

- ・植物の毒の強迫観念

同じ著者がルソーの「好きな花」を論じた別の文献では、ルソーは「有毒な植物には、強い関心を示していた」(Kobayashi, T., 2012, 81)とされている。著者はルソーが植物の毒の強迫観念に長く悩まされたことを『対話』や『告白』などの記述から明らかにしている。植物には、毒性を持つものがあるとの認識も、上記2つとともに彼の植物観を示していよう。

これらはどれも有益な分析と思われるが、扱われている植物観が3点で他にもまだ例を挙げることができる。本稿では、さらに検討範囲を広げて吟味する<sup>4)</sup>。

### B 日本語文献

荒井宏祐著 2008 『読み直そうルソーの「自然」—J.-J.ルソーにおける自然界とその思想』中央公論事業出版(以下「拙著」という)。

拙著は、ルソーの自然界観の考察を内容の一つとしており、植物観の「多義性」も考察している。そこでは「植物は生態的存在であり、人間の实用価値とは独立の内在価値、自己実現性を持つ生命体であり、また一文明化が本来の自然を損なうとの自説を証明するものでもあり一神の知性を知らしめる媒体」であるほか、植物学研究は「自然界の純粹研究の対象」でもあるなどとしている(95-96)。また、夫人あての8通の手紙の教育内容を検討(249-257)して、植物の構造への神の配慮、動植物間の循環、標本作成技術などを指摘している。本稿では、拙著で触れたルソーの言説とその解釈のうちのいくつか<sup>5)</sup>に再び注目するが、主として植物観と教育面への反映関係に関する以後の検討結果を述べる。また、「植物の教育力」を新たに考察する。

## 2 ルソーの植物観と教育面への反映

ここでは植物の観察や思索などから由来すると思われる植物観と教育面への反映を検討する。

### A 循環作用を営むもの<sup>6)</sup>

『化学教程』の「自然のメカニズム」の一節に、次の一文がある。

「全植物の必要物を根に供給するのは土壌である。一さらにある植物のからだは自らの生命と栄養を見出すのはまさに水においてであり、一動物たちに豊富な栄養ある糧を供するのは、植物たちの番である。こうした循環によって、自然はたえず自らを新しく生まれ変わらせ一常に若々しい様子を示しているのである。一以上によって、生体の発達における「自然」(Nature)のメカニズムについてのおおまかな観念が得られる」(ET X, 229-230)。

ここでルソーは、自然界のマクロとミクロの2つの循環系を指摘している。前者は土、水、光などの無機系のものが植物という有機系のものを育てること、後者は、植物が動物の糧となりその排泄物が肥料となって植物を豊かにすることを意味していよう。彼は『不平等論』原注で「樹木の果実は他の植物よりも豊かな栄養を動物に提供することを」「実験をして一自分も確かめた」(OC III, 198, 151)と述べている。ルソーは少なくともミクロの循環の知見を、この「実験」から得ているものと思われる。この知見をこの方法で得たことは、化学研究での実験の体験があったからとも推察されよう。

夫人あての植物教育の手紙には、同じく動植物間の循環を述べる次の一節(執筆1772年)がある。

「ニオイアラセイトウに一雄蕊と胚子とのあいだの花托の上に小さな腺が植えこまれているのが見つかるでしょう—これらは、植物界を動物界に結びつけ、双方を循環させる役目を自然によって定められた器官のひとつである—」(L 6949, 十二, 32)。

この「器官」は「蜜腺」のことで、虫媒花ではこの器官を通じて虫が花の繁殖に貢献し、花の繁殖は蜜の生産を増すことで虫の食糧を増すという循環関係が成立する。ルソーは、どちらにも「循環」の語を用いており『化学教程』の動植物間の循環の認識が虫媒花での動植物間の循環の認識に事例を変えて現れたものと思われる。

### B 社会変動の被害を受ける植物

『不平等論』(1755年出版)原注の一つに、次の一文がある。

「歴史が教えるところによれば、いずこの土地でも、多くの人が住み着き、文明化されるに従って、広大な森林を伐採しなければならなかった—土地の耕作が進むにつれて、住民がさらに工夫をこらして、それがなんであれ土地の産物を消費する量が増大していくにつれて、土壌の破壊、すなわち植物に適した物質の損失は、ますます加速したに違いない—」(Ibid., 198, 151)。

この一文でルソーは、まず「文明化」が森林破壊をもたらしたと指摘している。そして、当時の人口増加などが原因で増加したと思われる農業用土地開拓の進行とそれに伴う土地からの収穫物の消費増大に伴って土質の劣化、つまり「植物に適した物質の損失」の増大により、植物はその被害を受ける「被害物」であるとの見方を示していよう。ここで彼は、自然物の一つである植物が当時の社会変動の悪影響を蒙るという社会性を見出している。上記の一文はビュフォン(Buffon, Georges-Louis Le Clerc, comte de, 1707-1788)の『博物誌』からの引用の後で述べられているが、ルソーは「文明化」による「森林伐採」を「歴史が教えるところによる」(Ibid., 198, 151)こととしている。彼はここで、社会変動には犠牲を伴うことを指摘しているとも思われる。なお、この植物観の教育面への反映は見られない。

### C 他から独立した生命力をもち、有機的な組織体である植物

「辞典断片」の植物の定義に、次の一文がある。

「植物は生きた組織体であり—それぞれの部位は、各自、新たに自分を生み出していく能力を備えているのだから、他から独立した生命力を保持している。このことは否定できない」(OC IV, 1239, 十二, 125)と述べている。また「植物学断片」には、次の叙述がある。

「植物学者は植物においてそれらの組織、形態、機構、生殖、誕生、生育、生活、そして死を研究する—植物はひたすら有機的な存在」(OC IV, 1249, 十二, 139, 140)である。これらには、ルソーが「軽蔑や嫌悪さえ抱いた」(OC I, 180, 上 257)薬学的な研究に特化した当時の植物学の、人間の利益に従属する植物という見方とは異なる「他から独立した」生命価値を持つとの考え方が現れている。これは、Aの人間非中心

主義の自然界観が植物へ反映されたものとも解釈される。なお、ルソーは同じ「辞典断片」で植物を定義して「生命を賦されているが、感覚を欠く組織体」(OC IV, 1245, 十二, 134)とした。

また、植物の組織などが、最初の手紙の次の一節で教えられている。

「完全な植物は、根、茎、枝、葉、花、果実によって構成されています—よく調べなければいけない主要な部位が一つあります。結実の部位、つまり花と果実です」。花の部位に「自然はその作品をいつまでも存続させます」(L 6883, 十二, 12,13)。

ここでは、植物学者の研究対象である植物の組織、機構の一部が教えられている。

#### D 健康食材としての植物

『エミール』(1762年出版)には、健康食材としての植物観が見られる<sup>7)</sup>。

「農村の女は都会の女にくらべて、あまり肉を食わず、野菜をたくさん食べる。そしてこの植物性の食事は、当人にとっても子どもにとっても、有害であるどころではなく、有益であるようにみえる」(OC IV, 274, (上) 80)。

ここで彼は、菜食が女性や子どもの健康に有益であるという、健康食材としての植物観を示している。若い頃ルソーは、盛んに農村地帯を徒歩旅行している。農村の女性が菜食を好むとの叙述は、その頃彼が見聞きしたこととも思われよう。

この植物観の教育面への反映は見られない。

以上、教育内容の一部には、Cの有機体としての植物やAの循環作用を営む植物などの植物観が反映されている。前者でルソーは「植物は」という問いを発し「生きた組織体であり—」との答えを示しているように、植物は「植物とは何か」を学ぼうとする人に問いかけ、その答えを得るよう学びに誘うところがある。ルソーは『エミール』で「私たちに刺激する事物について私たちが自身の経験が獲得するのは事物の教育である」(OC IV, 247, (上) 29)としている。有機体としての植物などの教示に見られることは、植物のありさまに刺激されてそれが何かを考察した経験からルソーが得た答えであろう。この意味で、植物の教育は彼の「事物の教育」の実践例と見ることができ、ここに「植物の教育力」の一つを見出すことができる。ほかにも、植物の観察、「実験」、思索などが自然界や生物界の土台とされる植物の循環作用やあるいは健康食材としての植物など、さまざまな知識を増すことで、

いかに人間の知性をより豊かにするか、が示されている。これらはまた、ルソーが、植物の観察とはどのようなものか、それが何をもたらすか、という問いに対する彼なりの答えを示しているとも言えよう。

### 3 人間と自然との共生につながる植物観

2で見た植物観と教育内容のほかに、人間と自然との共生につながる植物観を検討する。人間と自然との共生が可能となるためには、まず人間が万物の支配者であると考え、いわゆる人間中心主義と呼ばれる自然界観を改めねばなるまい。ルソーは「道徳書簡」(執筆1757年~1758年と推定)で、2のAで見た自然界観とは別の考え方を述べている。

#### A 人間非中心主義的な自然界観

「われわれが個人として誇りを持つためには、まずわれわれの種に対して謙虚でありたいものです。ばかげた虚栄心を持って、人間は世界の王である、太陽も、星も、天空も、空気も、大地も、海も人間のために作られているのだ、植物は人間を養うために芽吹き、動物は人間に食べられるために生きているのだ、などと言ってはなりません」(OC IV, 1100, 十, 520)。

ここでルソーは、現代の言葉に換言すれば人間非中心主義的な自然界観を吐露しているとも思われよう。植物もまた、人間のために存在すると言ってはならないのである。ここでは、「人間非中心主義」的な植物観が現れている。これは、人間に万物を支配することを認める旧約聖書の教えとは異なるものとも解釈されよう。

こうした人間非中心主義的な植物観は、そのまま手紙には書かれてはいないが、手紙全体にはルソーの植物愛が至る所に滲み出ているようである。

#### B 人間の賢明さと徳、魂を益する自然(植物)の研究

イギリスのポートランド公爵夫人(Margaret Cavendish, duchesse de Portland, 1715-1785)は、植物学に造詣が深く、ルソーはイギリス亡命中に知り合い、1766年(L 5740)から1776年(L 7093)まで10年ほど文通が続いた。公爵夫人あての手紙に次の一節がある。

「自然の研究は、我々を我々自身から解放し、我々をその創造者に高めます。かくして自然誌と植物学は、賢明さと徳のために使われるのです」(L 5400)。

また、夫人あての最初の手紙に次の一節があり、教

育面への反映が認められる。

「私は確信しているのです。自然の研究は一もろもろの情念のざわめきをあらかじめ防いで、魂に一つの糧をもたらしてくれると。この糧こそ、魂を観想にふさわしい対象で満たして、魂を益するのです」(L 6883, 十二, 11)。これは、植物の教育を始める手紙の冒頭近くにあり「自然の研究」とは植物のことを視野に入れての言葉とも思われよう。これらは、ルソーの自然界やその創造主についての思索から生まれたものとも推察される。

なお、ルソーは有徳な人間の育成を教育に期待していた。それは『エミール』などで追及されているところである(坂倉, 2005, 142-167)。この植物学観は、徳性の育成と植物学に関心が深かったルソーの中でこの二つが結び付いたものとも理解されよう。

### C 美的な感情をもたらす植物

フランスロマン主義文学の先駆者ともされるルソーには、植物が「胸をわくわくさせる」感情をもたらすものでもあった。出版権限を持つ印刷局長官など宮廷の高官を勤め、ルソーと親しく交際したマルゼルヴあての書簡の次の一節を見よう。

「えにしだの黄金色やヒースの緋色が、胸をわくわくさせるような豪華さで、私の眼を打ちました一樹木の堂々としたたたずまい、まわりの灌木の姿の良さ、足元に踏んでいく草や花の驚くべき多様さー」(L 1650, 二, 478)。

また彼は「植物学断片」で「植物界は自然の三界のうちでもっとも豊かで変化に富み—植物学者が大地なる母の衣を織りなした工匠の神技と美妙の趣味にうっとりとして讃嘆する」(OC IV, 1249, 十二, 139)と述べている。

これらには、植物界の「胸をわくわくさせる」美しさ、見事さ、堂々とした様子やその多様さに我を忘れていたルソーの感激が示されている。またそこには「工匠の神技」とある通り、これらを創造した神の光も射していると感じているとも理解される。

ルソーは、植物教育を始める手紙のなかでこうした植物界についての感情を語っている。彼は、植物界を指して「自然の三界のうちでもっとも美しく、もっとも豊か」であると述べるとともに、「植物の構造あるいは組織について予備的な知識をいくらかそなえておくことにしたいのです」「たとえ数歩しかそこに踏み入れないとしても、やはりなにほどこかの知識の光に照らされて歩くことができるように」(L 6883, 十二,

12)と言っている。ここでは、彼のロマン主義的な自然界観が教育面に反映されていることが知られる。

### D 毒性と薬効がある植物

1750年出版の『学問芸術論』に次の一文がある。

「永遠の予見者(神)は、いろいろの有毒な植物と並んで有益な薬草を置いたり、多くの有害な動物の食物に、その動物の傷に対する治療剤を入れておくことによって自分の代理人である主権者たちに神の叡知をまねることを教えました」(OCI, 26, 47)。

ここでルソーは、植物は人間に害と恵みの両方を与えるものが併存する、つまり植物には両義性があると述べている。

有毒な植物のことは、手紙の次の記述(執筆1772年)に表れている。

「植物界の分析をしているくせに、無知のせいでドクニンジン入りのオムレツを食べるような破目におちいらぬようにしましょう—まず花を見なければなりません。ドクニンジンが本来の形質を備えるのは、花の様態においてです—花でドクニンジンとつきとめたら一葉を軽くもんで匂いをかいでごらんください。胸が悪くなるほど臭ければ、ドクニンジンです」(L 6954, 十二, 47, 48)。

ここには有毒な植物の被害にあわぬように、とのルソーの配慮が認められる。

なお、以上のほか2で見た循環作用を営む植物観や社会変動の被害を受ける植物観なども、その内容から、人間と自然との共生にかかわるところがあるものと思われる。

以上の教育内容では、自然の研究に含まれると思われる植物の研究が「魂を益する」とされていた。これはいわば、植物を借りて、植物以外のことを教えるものと考えられる。こうした例は、食料となる植物の結実部分が湿気などから守られるように堅固にできているところに神の智慧があることを教えるなど、似たような例があげられる(荒井, 2016, 91-92)。ルソーは、この教育方法が採用できることを思索や作品の執筆経験などから学んだものとも推測できる。これも「われわれを取り巻くもの」から学ぶ「事物の教育」の一つと考えられる。ここに「植物の教育力」のもう一つの例、つまり学びの「波及性」とでも言えるものを見出すことができよう。

ここでの検討では、人間と自然との共生につながると思われる植物観を見た。ルソーが説いていること

は、まず人間非中心主義の自然界観の担い手の一つとしての植物であり、「魂を益する」植物であり、またその美しく豊かな姿から人間に自然愛とともに植物愛を抱かせる植物観である。一方、自然界が人間に利益と被害の両方をもたらすように、植物にも人間に葉草など恵みを与えると同時に、有毒性による被害を与える両義性がある。自然界や植物と共生を図るためには、こうした両義性に注意せねばならないであろう。これらには、人間と自然との共生に関連を持つ内容を含むところがあり、それは現代にもつながる考え方とも見られよう。なお、ルソーの自然界観には、本稿でも触れたような、文明化が自然破壊を招くこと、動植物の循環など現代の生態系の考えにも通じるものがあること、さらに人間非中心主義のような環境倫理学の考え方と似たものがあるなど、現代の「環境思想」を思わせるものがあることは、先行研究Bの拙著（前掲書、2008、16-79）で示した。

また、本稿で扱ったほかにも、植物標本が商品として売買されるという植物観（L 6479）や『夢想』に見るような迫害に苦しむルソーを癒す力のある植物観（OC IV, 1073, 128）など、今回取り上げられなかった植物観も残る。これらは、他日稿を改めて論じたい。

#### 4 植物の教育力の理由の考察とその根拠

以上の検討では、「植物の教育力」には少なくとも、植物とは何かとの問いに答えるように人を学ばせる面と植物を借りて植物以外の事柄の学びへと誘う面の二つがあることが示された。ここでは、そう考えてよい理由とは何か、またその根拠はどうか、について検討する。

##### A 植物の持つ未知性

植物とは何か、との問題に対する答えはまだ完成したわけではないようである。例えば、これまで植物には感覚がないと信じられてきた。ルソーも前章Cで見たように「感覚を欠く組織体」と定義している。しかし『植物は〈知性〉をもっている』（原書2013、邦訳2015出版）<sup>8)</sup>と題する植物生理学研究の最新の状況を伝える一書は、植物は「人間と同じように一五感すべてがそなわっている。いやそれどころかほかに十五もの感覚をもっている」（同邦訳書、70）として「根っこの視覚／トマトの嗅覚／オジギソウの触覚」などをあげている。これが、十分に同意が得られるものかどうかは暫く問わないとすれば、まだ未知の植物の性

質が人間の関心を引き、新たな知識の獲得へと誘う力となり得る。このように植物に未知の部分があることが、植物の教育力の理由の一つとなろう。

##### B それ自体に資源性などがある自然性

また植物とは何か、の問いは人間に役立つところとは何かという問いに通じる。2のDで見たように、ルソーは健康食材としての植物観を示した。「食用植物」という言葉がある通り、植物は重要な食糧源である。そればかりか「食物連鎖の土台」（前掲邦訳書、63）であり、エネルギー資源の一つであり、建築資材など人間の活動の基礎資源でもある。また、葉緑体による酸素の供給は動物にはできないこと（同邦訳書、201）である。植物に自然に備わっているこうした性質が、人間を新たな価値の探究に向かわせ、その多様性を教えるのである。ただし、この価値の探究はルソーに嫌われない程度にする必要がある。

##### C 波及性

「植物の教育力」の他の一つが、植物を借りて植物以外の事柄の学びに人を誘うことであった。2のAでは、動物と循環を営む植物が「自然のメカニズム」の一翼を担っていること、また、Bでは「被害物」としての植物は、社会変動には犠牲が伴うことを告げ、さらに3のBでは植物学の研究が、「徳のために使われる」とされた。これらはすべて植物の研究を通じてのことである。植物は、単に自らの構造や性質が知的営為の対象となるだけでなく、他の事柄に学びを波及させることで、人間の知識や感性の到達距離を広げ、知識や感受性をより豊かにさせることが示唆される。ここに、植物が教育力を持つとしてよい理由がある。

以上、植物に教育力がある理由を3つあげた。これらは、一部参考にした『植物は〈知性〉をもっている』の引用部分以外はルソーの植物観との関連から由来するものである。

上記の通り考察された理由が、ルソーの植物観から導き出されたものであるため、理由の根拠もルソーの言説と教育実践に求められるかどうか、検討する。

##### D 植物の持つ未知性

ルソーは植物の感覚の存在を否定したが、他方人間の感覚器官には限界があることを「道徳書簡」の中で次のように指摘している。

「どれだけ多くの動物が、本能という不可解な言葉よりは、人間には未知の何かある器官のせいにした方が良くように思われる、いろいろな慎重さや、見通しや、途方もない悪賢さを持っていることでしょうか。あらゆる存在の能力を、我々の能力に応じて規定するとは、何と言う幼稚な傲慢さでしょうか—我々は—もっとも真理を知るに適した器官をわずかしか授けられていない存在ではないと、いかにして確信しうるのでしょうか」(OC IV, 1097, 十二, 516)。

ルソーはここで、人間の感覚器官の限定性を指摘し、われわれをとりまく「あらゆる存在」に人間に未知の部分が残りうることを述べている。従って植物の教育力の理由の一つに「植物の未知性」をあげることが可能であると考えられる。

### E それ自体に資源性などがある自然性

ルソーは健康食材としての植物観を示していたが、彼が「1764年にコルシカ出身のフランスの軍人に一依頼」(遅塚, 1989, 497) されてコルシカの新体制を提言した「コルシカ憲法草案」(出版1968年)では、必要な資源の輸入量を減らし、自給量を高める方策の一つに「最も必要な原料を確保すること」をあげるとともに「この島には、建築用の木材や暖房用の薪炭が豊富に存在する」(OC III, 926, 十, 319) と述べている。ここでルソーは、本章Bで述べたような建築資材やエネルギー資源など、資源性が植物にあること、また、それらが「この島には豊富に存在する」として性質としてはそれが自然のものであることを述べている。植物「それ自体に資源性などがある自然性」は、彼が認めるところであり、彼の言説の中にその根拠を求めることができる。

### F 波及性

この根拠は、ルソー自身の植物の教育実践の中に求められる。例えば、前述のように植物学は「徳のために使われる」とある。これらは植物の研究を通じて、つまり植物を借りて学びを徳性の育成という他のことに波及させている。即ち、植物自体以外の事柄を教えているものと思われる。波及性は、ルソー自らの教育実践の中に認められることであり、理由の根拠は、ここに求められると考えられる。

### 5 ルソーの植物学の知識水準に関する同時代の評価

総括に入る前に、ルソーの植物観の基礎の一つに

なったとも思われる彼の植物学の知識水準に関する同時代の評価がどのようなものであったかについて検討する。

これは、ルソーの「関連テキストの実に半数以上が刊行されていない」(小林, 2009, 209) という現況では十分に解明するのは困難とも思われよう。ここでは、彼が当時どのような知識レベルにある植物学者などと、どのような規模で交流していたか、という点を吟味する。

ルソーの植物学研究に関する著作が多いクックは、彼が「スエーデン、スイス、イギリス、フランスの植物学者」との文通を中心とする「18世紀の植物学の文通交換ネットの活動的な参加者だった」(Cook, A., 2007, 265) と述べ、公爵夫人のほか植物学の多くの著書がある「ラトゥレット (La Turrette, Antoine-Louis Claret de, 1729-1793) や「教授で—2冊の本を出版した」グーアン (Gouan, Antoine, 1733-1821), 医者で医学博士のクラピエ (Clappier, Pierre) の名前をあげている (Ibid., 265)。また「植物学者のプリンス」(木村, 1983, 74) とも言われるリンネ (Linne, Carl von, 1707-1778) の業績を研究し、文通を行っている (L 6891)。

ルソーの植物学研究の諸相を考察する小林卓也は、ルソーが「まさにヨーロッパの規模の科学者ネットワーク、しかも第一級のそれと深くかかわっていた」(小林, 2009, 220) と述べている。こうした当時「第一級」の植物学者などがルソーの参加を認め、ともに交流を続けたという事実からは、ルソーの知識水準についての同時代の評価が、少なくとも低いものではなかったとも推察されよう。ただし、こうした評価がさらに明確になるのは「半数以上が刊行されていない」関連テキストが公刊され、研究者の活発な研究が可能となつてからのことと思われよう。

### 総括

以上の限定的な検討によっても、ルソーの植物観が多様であり、また広い範囲に及ぶことが示された。またこのことを通じて、彼は植物とは人が知性と感性を十分に働かしさえすればさまざまなことを学べるものだと考え、教育面に反映し、実践したとも思われる。本稿では、「植物の教育力」を二つあげた。この理由とその根拠は、彼の作品や教育実践のなかに認められる。ルソーの植物の教育は、彼が説く「事物の教育」の実践版であったとも思われる。植物は、前述したように自然界や生物界の土台として、重要な位置

を占めるものである。この点をよく理解したルソーは、だからこそ循環作用など植物の教育を展開したと考えられる。

手紙の出版(1782年)後の影響としては、ケンブリッジ大学の植物学教授トーマス・マーチンが、ルソーが扱っていない植物の種類について、8通の手紙を補完する形での書簡体の入門本を1785年に英語で出版し「20年で7版」(Quindos, F.C., 2012, 87)を重ねたこと、また続いてドイツ語訳、ロシア語訳が出版(1781, 1810)され(高橋, 1987, 563)評判が広がったこと、さらに「男女の著しい数の集団がルソーの計画の後追いに努めるようになり一入門用の作品が大衆化し、数十年の間に並外れた出版上の成功を経験する」(Quindos, F.C., 2012, 88)とする研究があることなどがあげられよう。ルソーが、手紙の形で示した植物の初歩教育の試みは18世紀後半から19世紀前半にかけて、少なくない影響を与えたものと思われる。

### 今後の研究課題

今後の研究課題の一つは、「植物の教育力」がほかにあるか、また、ルソーに追随したとも思われる著作には、植物の構造、部位の役割など植物そのものに即した内容のほかに、果たして植物が秘める教育力についての考察を盛り込んだものがあるのか、また、その理由や考察の妥当性について検討を加えたものがあるのか、さらに、現代の研究にはいかなるものがあるのか、それらと引き比べて、ルソーの教育思想や実践から学べるものがほかにあるのか、今後の研究課題の中にはこれらの検討が含まれよう。

### 注

- 1) うち8通は、ルソー全集(OC, ET)などに「植物学についての手紙」などとして収録されている。
- 2) (上)や数字のみのものは、『不平等論』を除き岩波書店版の邦訳書を示す。また、十二などは白水社版の邦訳の巻数を示す。
- 3) この草稿は、ルソーがその没年(1778年)に託したとされるムルトウ(Moulou, Paul-Claude, 1731-1787)牧師宅から没後1世紀を隔てた1882年に発見され、20世紀初頭(1918-1919, 1920-1921)に初めて出版された。
- 4) ほかに、外国語文献で植物観について「植物界は一「情熱を十分安静化する魅力」を、全体的な認識の陶醉を、そしてトラブルを持ち不幸な精神の気分転換の対象を提供する」(Spallanzani, M., 2003, 124)などの言及がある著述を披見できた。
- 5) 2のA, B, Cと3のA, D及び4のD, Eで引用したルソーの言説は、拙著でも引用したが、本稿では、新しい解釈を追加したり、別の文脈で扱っている。

- 6) 拙著では、この記述を現代の生態学的概念との対応から「生態的存在」としたが、本稿ではルソーの表現に添って「循環作用を営む」植物とした。
- 7) 小林も、この点を指摘している(本文1のA, 5, ET XI)。
- 8) 原題Verde Brillante : Sensibilità e intelligenza del mondo vegetale (和訳名輝ける緑—植物界の感覚と知性)。

### 参考文献(以下、本文に書誌情報を記載したものを除く)

- 1 外国語文献。
- Bensaude-Vincent Bernadette et Bernardi Bruno 2003, « Rousseau chimiste » dans *Rousseau et les sciences*, Bensaude-Vincent B., et Bernardi B.(dir.), L'Harmattan.
- Cook, Alexandra 2007 « Idées et Pratiques scientifiques dans La correspondance botanique de Jean-Jacques Rousseau » dans *Annales de la société Jean-Jacques Rousseau*.
- Quindos, Fernando Calderon 2012 « La reception scientifique des Lettres élémentaires et le phenomena de la botanique à l'usage des femmes » dans *Rousseau botaniste*, sous la direction de Jaquier Claire et Lechot Timothée (eds.), éditions du Belvédère.
- ルソーの原著全集からの引用文は、下記を利用しOCと略称した。邦訳は、右記を参照したが一部改めたところがある。
- Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau*, 1959-1995 Édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymon, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 5tomes.
- Discours sur Les Sciences et Les Arts OC III, 山路昭・浜名優美・原好男・宮治弘之訳 1990「学問芸術論」『ルソー全集』第四巻白水社。
- Discours sur L'Origine et Les Fondements de L'Inégalité OC III, 坂倉裕治訳 2016『人間不平等起源論』講談社。
- Émile ou de L'Éducation OC IV, 今野一雄訳 2009『エミール』上, 中, 岩波書店。
- Fragments de Botanique OC IV, 高橋達明訳 1987「植物学断片」『ルソー全集』第十二巻白水社。
- Fragments pour un Dictionnaire des Termes d'Usage en Botanique OC IV, 高橋達明訳 1987「植物用語辞典断片」『ルソー全集』第十二巻白水社。
- La Nouvelle Héloïse OC II, 安土正夫訳 1997『新エロイズ』(三) 岩波書店。
- Les Confessions OC I, 桑原武夫訳 1997『告白』上, 中, 岩波書店。
- Lettres Morales OC IV, 戸部松美訳 1990「道徳書簡」『ルソー全集』第十巻白水社。
- Les Rêveries du Promeneur Solitaire OC I, 今野一雄訳 1994『孤独な散歩者の夢想』岩波書店。
- Rousseau Juge de Jean Jacques Dialogues OC I, 小西嘉幸・宮ヶ谷徳三訳 1990「ルソー ジャン=ジャックを裁く一対話」『ルソー全集』第三巻白水社。
- Projet de Constitution pour la Corse OC III, 遅塚忠躬訳 1989「コルシカ憲法草案」『ルソー全集』第五巻白水社。
- Correspondance complète de Jean Jacques Rousseau*, 1965-1998 édition critique établie et annotée par R. A. Leigh, The Voltaire Foundation at the Taylor Institution Oxford, 52 tomes. Lと略記し、書簡番号を記した。



本資料に示した手紙は、ここから引用してある。邦訳は、8通について高橋達明訳 1987「植物学についての手紙」『ルソー全集』第十二巻白水社を引用した。ほかに次を参照し、ETと略記した。

*Jean-Jacques Rousseau*, Édition Thématique du Tricentenaire Œuvres Complètes Raymond Trousson et Frédéric S. Eigeldinger, (dir.).

« Institution Chimique » dans *Écrits scientifiques* ET X, 2012, Éditions Skakine, Éditions Champion.

Kobayashi Takuya 2012 « Quelles sont les plantes favorites de Rousseau? » dans *Rousseau botaniste* Jaquier Claire et Lechot Timothée, (dir.), éditions du Belvédère.

Spallanzani Mariafranca 2003 « Les êtres et les signes. Rousseau et l'histoire naturelles » dans *Rousseau et les sciences*, sous la direction de Bensaude-Vincent B., et Bernardi B, (dir.).

また外国の人物の氏名や生没年は、*Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau publié* sous la direction de Raymond Trousson et Frédéric S. Eigeldinger 1996 Honoré Champion parisによった。

2 日本語文献 (邦訳を含む)

荒井宏祐著 2016 「ルソーの教育思想と実践との関連及び「隠された」政治性の探求—『エミール』と植物教育の手紙を軸に—」『研究室紀要』第43号東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室。

木村陽二郎著 1983『ナチュラリストの系譜—近代生物学の成立史』中央公論社。

小林卓也著 2009 「『植物学者』ルソー」『思想』NO1027。

坂倉裕治著 2005『ルソーの教育思想—利己的情念の問題をめぐって—』風間書房。

ステファノ・マンクーゾ+アレッサンドラ・ヴィオラ 序文マイケル・ポーラン著久保耕司訳 2016『植物は〈知性〉をもっている』NHK出版。

高橋達明著 1987「解説 ルソーの植物学」『ルソー全集』第十二巻 白水社。

遅塚忠躬著 1989「解説 コルシカ憲法草案」『ルソー全集』第五巻 白水社。

(指導教員 田中智志教授)